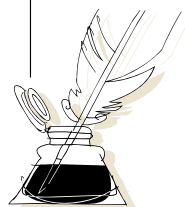


人生讃歌

檜山博

まぐれ人生



思いがけない幸運のことを、まぐれ幸いというそうだ。要するに、まぐれのことである。ぼくはこの言葉のもつ掴みどころのない曖昧さが性に合うのか、気に入つてよく使う。実力がなくてもいいことが転がり込んでくるという雰囲気、ぼくみたいな劣等感まみれの者には頼りになるのである。かといって、まぐれという状態が何の根拠もなく起こることだなどと思っているわけではないが、根拠などは何でもいい。とにかく物事がうまくいくことはありがたい。

★

前にも書いたことがあるが、十二歳までに落命しそうになったことが三回ある。八歳のとき高さ五メートルほどある白樺の樹の頂上にある葡萄の実をとろうと上り、枝が折れて落下した。地面の倒木に頭や背中を打つて気絶したが、助かった。死ななかつたのは、まぐれだと思う。十歳のとき学校に体育館がないので跳び箱は廊下で跳んだ。ぼくは背が高いうえ目立ちたかつたのだから、箱を四つ重ねたので跳び上がった瞬間、脳天を天井の太い梁の角にぶつけて落下、気絶した。だいたい血が出たが五日でなおった。ある人に体がうまく反応したと言われたが、それだつて偶然のことだとぼくは思つてゐる。打ち所が悪かつたら死

んだ、と父に言われたが、ぼくは、まさか、と思つた。七十七年たつたいまなお脳天に瘤と傷跡がある。

十二歳のとき学校で野球をしていて、ぼくは三塁を守つてゐた。投手が投げた球を打つた打者のバットが手からすっぽ抜け、三塁手のぼくのほうへ空中を飛んできた。アツと思つた瞬間、バットがぼくの口に当たり、ぼくは気絶して倒れた。上の前歯が二本、根本から抜け落ちて血まみれになった。このときも父に、当り所が悪かつたら生きてなかつた、と言われた。そして「バット飛んでくるの黙つて見てたのか、なんで避けなかつたのよ」と笑われたが、そんなことわかるわけない。このとき折れた歯は七十七年間ずっと入れ歯だ。ほかにも当時、川で溺れたり茸とりに山奥へ入つて迷つたりなど、危ない場面を通り抜けてこられたのは偶然の幸運だと思つてゐる。

★

予期しない幸運に出合う意味ではほかに「勿怪の幸い」や「奇福」「僥倖」「零れ幸い」などがあり、どれもまぐれと同じような意味だと辞典にある。みな、我が迷える生き方の寄り添ひである。だがこんな、思いがけずうまくいくとか好都合にすむ言葉を探して喜んでゐるのは、ぼくに自力で運命を切り開いてゆく才力がないからなのではわかつてゐる。わかつてゐるから、俺はついてるんだと考えて、自分を奮い起たせたいのだと思つてゐる。

★

中学卒業後は馬を二頭もらつて出稼ぎにでもいくはずだったが、担任の先生が父を説得してくれ高校を受けた。信じられないことだが、入試解答が満点だったらしいのも、思えばうまい具合にぼくが当てずっぽうに勉強してたとこばかり出たからできただけのはなしだ。まさしくまぐれである。

十八歳。高校三年で就職先がなく眠れないほど困つてたとき、

北海道新聞の文選工の職場を受けた。二十三人採用に三百人以上の受験者がいて諦めたが、小論文の『私の不満』という題が気に入った。四百字詰め原稿用紙三枚を書き終わると、最後の行の升目が二個残っただけだった。大学を諦めて就職するが、いつかおカネをためて大学を受けたい、と書いた。今思うと、こんな腰の据わらないことを書いてよく入社させてもらえたものだと思いが、これなんか本当にまぐれだ。

四年間、活字ひろいをしながら隠れるように同人誌を出し小説を書いた。予備校へ通ったり慶應大学の通信教育を受けたりしたが三年でやめた。ある日、突然、東京支社の編集局への



挿絵/中江潤一

転勤を言われた。俺が？と思いい、部長に理由を聞くと「君は東京が似合うから」と、わけのわからないことを言われたが、文選工で使いものにならず追い出されたに違いなかった。それにしても嬉しかった。

★
東京支社の社員で野球チームをつくり、ぼくは三塁手で中日新聞の支社と試合をした。一点取っていた五回、こちの攻撃で二死、二塁、ぼくの打席だったが相手投手の球が速すぎて見えない。仕方なく投手が投げた瞬間ぼくは眼をつぶり、イチ、ニイ、サンで闇雲にバットを振り回したのだ。するとどうだ。三塁打になつて逆転したのである。見事なまぐれである。

しかし思いがけない幸運なんてそうあるものではない。ほとんどが失敗の記憶ばかりである。小学校の六年間、運動会の徒競走ではずっとビリだった。小学生ころ近所の友達と遊んだ石蹴りや鬼ごっこ、縄跳びや石での水切りはほとんど負けた。高校三年の秋、北海道新聞の前に北海道電力の就職試験を受けた。なんとかかんとか面接までいったが落ちた。二十歳から十五年間、同人誌に小説を書き続けたが問題にされなかった。どれもこれも実力もまぐれもなかったということである。

★
三十七歳のとき書いた小説が芥川賞の候補になり、次の作品も直木賞の候補になったのも、そのときうまい具合に、ほかにいい作品がなかったからほくに回ってきただけの気の気がする。まさに零れ幸である。こういうふうには、ぼくの人生のうまいことこのほとんどは、思いがけない幸運のつながりだったと思う。たまに、まぐれも実力のうちだ、と開きなおったこともあったが、いい気分だった。

まぐれ、ありがたい。ほんとこいである。

①